

人的資源から見るロシア帝国の中央アジア統治

——ジギトを中心に——

秋山 徹

中央アジア現地民に対する警戒感と猜疑心を背景に、ロシア帝国は中央アジア現地民の組織的な人材育成術に乏しくかつ消極的であったことが指摘されている。事実、ロシア帝国は中央アジア現地民に対して徴兵制を導入しなかった。また、民族知識人に対する警戒感を一方的に強め、彼らの活用に消極的であったことが知られている。

このように、近代のかつ組織的な次元において、ロシア帝国が中央アジア現地民の人材育成・活用に失敗したことは確かであるとしても、他方で、中央アジアを征服し実際に統治してゆく際に、在地の人的資源に依拠する側面は決して少なくなかった。こうした観点から、本報告は「ジギト (dzhigit)」に着目した。

ジギトとは、元来「若い、若者」を意味するテュルク語「ジギット (jigit)、イギット (yigit)」に根差し、護衛、伝令および斥候兵としてロシア軍に付き添う、カザフ、クルグズなどの遊牧民を指すロシア語の単語である。本報告ではまず、ロシア帝国の軍事侵攻が活発化する19世紀中期の中央アジアにおいて、遊牧民社会がコーカンド・ハン国を初めとする周辺勢力と関係を取り結ぶ際にジギトの提供が重要な媒介となっていたことを確認した。その上で、ジギトの提供という在来の慣行を活用しながらロシア帝国が征服、併呑を進めていく様相を明らかにした。さらに、軍事征服が完了し、直轄統治を遂行する上においてもジギトが重要な役割を果たしていたことを示した。

(早稲田大学イスラーム地域研究機構)